

## 独自の創意工夫で成績向上

豚胸膜性肺炎 (App)が広がったのを機に、オールイン・オールアウトで病気に強い肥育をするため、2018年にスクラップ&ビルドでSPF農場に切り替えました。入場時のシャワーや各豚舎専用の長靴の使用など、土壌菌などを持ち込まないために細心の注意を払っています。母豚の消耗を防ぐため、授乳頭数は10頭程度に抑え、その他の子豚はミルクウィーンフィーダーで哺育。人工哺乳で育った子豚の発育に問題は見られません。母豚1頭あたり出荷頭数を年30頭にする事が今後の目標です。



有限会社高橋畜産  
高橋 洋平さん (北海道)

母豚200頭規模の一貫経営をする当農場では、豚舎ごとの給餌内容等を細かくマニュアル化し、各担当者が責任をもって管理。肥育舎では3週分のロットを1豚舎に収容し、柵の位置によってロットごとの飼養面積を変えられるようにしています。肥育ステージごとの成績目標値を設定し、達成時には担当者にボーナスを支給。母豚1頭あたり年間出荷頭数26.3頭、出荷時平均体重114.5kg、枝肉平均重量76.9kg、離乳から出荷までの事故率1.2%といった成績は、こうした工夫の成果だと思えます。



有限会社八王子安澤畜産  
平田 里美さん (茨城県)

当農場は8~9カ月齢の発情で種付けし、12カ月齢で初産が終了するようにしています。母豚の体型は、P2点測定を利用した給餌量調整で管理。オールAIに移行した直後は受胎率が82%まで落ちましたが、AIバンドの装着によって以前の水準の89%に回復させました。母豚の履歴を記したカードで担当者間の情報共有を図り、難産だった記録を持つ母豚には出産時の介助を欠かしません。里子はサイズを統一してグループ編成。体の小さいグループを哺乳能力の高い母豚につけるといった工夫もしています。



株式会社西日本ジェイエイ畜産  
矢下SPF豚農場  
安部 泰宏さん (鳥取県)

当農場は900頭だった母豚を860頭に減らし、空いたストールで育成豚をしっかり管理するようになりました。母豚の体が十分にできるまで発情を見送らせ、初回種付けを遅らせるようにした事で、2019年度に92%という高い分娩率を達成。P2点測定は行わず、分娩前のボディコンスコアが3.5になるよう調整して早期に体型を戻す事を心がけています。AIについては、2産までは「ADカテーテル」、3産目以降は「マガプラス(深部注入)」を使用し、子宮頸管を傷つけないよう細心の注意を払いながら実施しています。



JA北九州ファーム株式会社安岐農場  
藤永 和彦さん (大分県)

# ハイコープ種豚の能力を高め繁殖成績を向上させる



## 第14回全農養豚セミナー

通算14回目となる「全農養豚セミナー」が2020年11月27日に開催された。新型コロナウイルスの影響を受けてオンラインでの開催となったが、特別講演や動画による優良農場の事例紹介などが行われ、今回のテーマである「種豚の活用と繁殖成績の向上」に向けた貴重な知見を共有する機会となった。



全農畜産生産部 遠藤充史次長  
全農畜産生産部 由井琢也部長



Web PICSの集計概況もオンラインで伝えられた

Web PICSの集計概況や優良農場の取り組みなどを発表

2006年にスタートし、今回で14回目を迎えた本セミナーは、コロナ禍にあつて初のオンライン開催となった。全農畜産生産部の由井琢也部長は、「生産者の皆さまやJAグループの関係者をはじめ、多くの方々にオンラインで接続いただきました。会場にお集りいただく事ができなかった反面、遠方の方はむしろセミナーに参加しやすくなったのではないかと思います」と挨拶。続いて、生産成績集計の基礎となる「くみあい養豚生産管理システム Web PICS」の集計概況が報告された。19年は362農場が同システムを導入しており、うち183農場が集計に参加。母豚1頭あたりの年間平均離乳頭数の推移などが伝えられた。



「非接触型養豚」を実現するものとして、更に利用が広がるものと思われ

次いで、株式会社農林中金総合研究所の阮蔚理事が、中国における養豚の最新情勢について特別講演。事例発表では、成績優良な全国4農場の取り組み事例が動画で紹介され、オンラインで接続した生産者と会場にいる関係者との間での質疑応答も活発に交わされた。

全農畜産生産部の遠藤充史次長は閉会の挨拶で、「同じハイコープ種豚を飼養しても成績向上に向けた工夫は農場ごとに異なる事がよく分かりました」と述べ、事例発表で各農場が貴重な飼養管理データを惜しみなく公開してくださった事に謝意を表した。

中国では2018年から19年にかけてASF(アフリカ豚熱)が全土に広まりましたが、それを機にバイオセキュリティ水準がにわかに高まり、現在は感染拡大を効果的に抑制しています。ASFは結果的に、中国の養豚業のレベルアップを促す事につながりました。

中国では16年以降、政府の環境維持政策の一環として、大都市近辺の養豚場が相次いで閉鎖されています。そこにASFが発生した事で、18~19年の国内豚肉生産量は大きく減少しました。近年の中国では豚を含む食肉全体の輸入量が増大しているため、19年末に政策を転換して養豚を促進しました。それを受けて大手養豚各社は、全体で20億頭も増産する新規投資計画を打ち出しています。

そこで注目されるのが、限られた面積を有効活用する「ビル養豚」と、飼養管理にICTを駆使する「スマート養豚」で、数十万頭を飼える高層豚舎や、全工程が自動化されて人が立ち入る事のない豚舎などが運用されるようになりました。

そのような飼養環境を支えるのが、養豚場向けプラットフォーム「豚ネット」です。生産資材供給者、肉豚流通業者、金融機関をネットワークし、養豚農家が必要な各種サービスをワンストップで提供しています。無人のスマート豚舎やネット上の飼養管理プラットフォームは、ASFや新型コロナウイルス対策となる「非接触型養豚」を実現するものとして、更に利用が広がるものと思われ

〈特別講演〉  
中国におけるASFとスマート養豚の最新情勢

(株)農林中金総合研究所  
ルアンウェイ 阮蔚 理事研究員



※31ページに用語を解説